

図書紹介

三上敦史著

『近代日本の夜間中学』

大崎 功 雄*

「夜間中学」といえば、映画「学校」の舞台となった義務教育段階の学校（学級）を連想するが、本書の対象はそれとは別種の、旧制度下における中等教育レベルの学校である。それは、「中学」「中等」などの名称を使い、「中学校」程度の教育課程は施すが、制度としては「中学校」とは異なる、さまざまな教育機関の俗称・通称である。強いて現在の制度に置き換えてみれば、高校の夜間課程（定時制課程）に対応する。しかし、制度こそ違うが、勤労青少年（時には成人）の学びの場としては、お互い通じ合うところもある。

本書は、この夜間中学の誕生から戦後新学制に移行しその使命を終了するまでを描いた通史である。原著は「近代日本の夜間中学に関する歴史的研究」と題する学位（博士：北海道大学、2002年）論文であるが、この種のものによくありがちな硬さが少なく、リーダブルで、一気に読むことができる好書である。一読してまず感じるのは、きわめて爽やかな読後感である。そして充実感であり、さらに今後への期待感である。

夜間中学に関する歴史的研究は数少ない上にきわめて不正確でもあった。これに本格的なメスを入れたのが菅原亮芳の一連の業績である。本書はこれをふまえ、1886年の中学校令制定期から1948年の学校教育法施行に至るまでの60余年に及ぶ夜間中学の全体像を、その制度的変遷と関係した人びとの活動・要求の歴史の変遷に着目して描くことを企図している。菅原の研究が1932年の「専検指定」を経て1943年の中等学校令による夜間中学の「正格化」の過程を明らかにしたものとすれば、本書は「正格化」しなかった夜間中学を含んでの全体史を描くことにより、「正格化」の意味を再吟味したもの。構成を示すと、序章、第1章 夜間中学の誕生、第2章 夜間中学の拡大、第3章 夜間中学への専検指定開始、第4章 総力戦体制下の夜間中学、終章、の全6章からなり、さらに巻末に参考資料とし

*北海道教育大学

て全国の「夜間中学の設置形態・名称の変遷」が収められている。

森有礼主導になる中学校令の施行により、中学校（尋常中学校）は夜間のみはその教育課程を満たすことができなくなり、事実上夜間授業は禁止となった。これが解禁されるのは1943年の中等学校令によってである。この禁止された夜間授業に代わって、あるいは中学校未設置地域に、夜間にこれと同程度の授業を行う私立の各種学校が誕生する。これが夜間中学の原初的形態の一つである。第1章では、1880年代から1900年代にかけて誕生し、やがて「中学」「中等」を標榜するに至る私立の夜間各種学校の誕生の経緯、その卒業者に付与される各種特典等が考察される。第2章では、1910～20年代の夜間中学の量的拡大が扱われる。中学校入学難解消と思想善導という社会政策面からの中学校二部教授論の展開、有馬頼寧主導による社会事業としての信愛中等夜学校設置（1919年）の意義、東京府における中学校夜間教授の認可申請とゲーリー・システム導入、北海道における「準公立」の夜間中学開設、震災救護事業としての準公立の夜間中学開設を契機として高まる夜間中学公認要求の行方、1924年の専検制度の改革などがその主な内容である。

第3章は、1920年代後半から30年代の夜間中学が対象。夜間中学公認運動の推移、1932年の「専検指定」によるこれへの対応、そして専検指定後の夜間中学の動向などが明らかにされる。ここでの著者の新機軸は、専検指定後も専検指定と非指定の学校が併存する地域（札幌）の動向を分析し、夜間中学に学ぶ青年たちが期待していたものは進学よりも中学校程度の学力を身に付けることであると、し、「夜間中学＝進学」という図式化では捉えられない、就学保障機関としての夜間中学像を打ち出したことにある。そして、専検指定の歴史的評価としては、進学障壁を撤廃したこと以上に「中学校の下限を引き下げ、学力重視だった無学歴者の学習世界に学歴を持ち込んだ」ことこそ重要であって、これにより「中等学歴」は急速に一般化したとしている。

第4章では、専検指定後も中学校とは明らかに異質な夜間中学の総力戦体制下における制度的な「正格化」過程が扱われる。1935年の青年学校男子義務制導入の影響、中等学校令による夜間中学校への制度的再編、そして戦争末期における「昼間授業の中学校を襲った直接的・暴力的な措置」を免れた夜間中学の特異な在り方が検討される。これらを通じて著者は、夜間中学は総力戦体制の影響を受けながらも、むしろ「制度的に充実し、昼間授業の中学校との格差が次第に消えて

ゆく結果」を描き出している。

そして終章で、著者は戦後の新制高等学校夜間課程に移行していく夜間中学の戦後史を概観し、本書全体の総括、達成した成果、そして切り拓いた地平を概括している。

本書の意義として、無学歴青少年の学びの場に教育史研究の鍼を入れた点をまず挙げたい。読後に抱いた爽やかさはこの歴史研究の視座にある。次に、各地方図書館・公文書館で博搜した史・資料をもとに、41道府県と樺太・朝鮮・台湾の226校に及ぶ夜間中学を確認し、これらの全体像を描き出した実証的歴史研究の確かさを指摘しておこう。巻末の参考資料に結実している。読後の充実感の正体はこれであった。そして、本書の先には、著者自身も確認している中等学校制度の全体史、あるいは個別学校史や制度の社会史、無学歴者の学びの社会史・生活史等、多方面にわたる研究が開かれている。読後における期待感はどこにある。一読をお勧めしたい。

三上敦史著『近代日本の夜間中学』

北海道大学図書刊行会、2005年、8200円